# アフリカの自然

鹿野一厚

サバンナ

## アフリカの大きさを知る

まずはクイズから。

問一　アフリカにはどれくらいの国があるでしょうか？

①　一カ国
②　約三〇カ国
③　約五〇カ国

問二　アフリカの面積はだいたい何平方キロメートルでしょうか？（ちなみに、日本の面積は約三八万平方キロメートルです。）

①　約三二九万平方キロメートル
②　約九六〇万平方キロメートル
③　約三〇〇〇万平方キロメートル

問三　アフリカの人口は何人ぐらいでしょうか？

①　約九億人
②　約一一億人
③　約一三億人

アフリカはひとつの国の名前だと信じている人がときどきいますが、皆さんはまさか①とは答えなかったでしょうね。問一の答えは、③の約五〇カ国、正確には五三カ国です。

問二はどうでしょうか。アフリカの面積は、③の約三〇〇〇万平方キロメートルで、日本の面積の約八〇倍もあります。ちなみに、①はインドの面積、②は中国の面積です。

さて、最後の問三はどうでしょう。日本の面積の約八〇倍もあるのだから、アフリカ全体の人口は五〇億人はくだらないだろうと思われますが、実は、正解は①の約九億人、つまり日本の人口（約一億二七〇〇万人）の約七倍にすぎないのです。ちなみに、②はインドの人口、③は中国の人口です。インドや中国の人口の膨大さがわかるとともに、これと対比すると、アフリカの人口の少なさが浮き彫りになりますね。

さて、このように皆さんにクイズに答えてもらったのは、アフリカの大きさを少しでも実感してもらいたかったからです。アフリカは、世界の陸地の総面積の約二〇％を占め、世界の国々（一九二カ国）の四分の一が集中し、世界人口（約六四億人）の一四％が居住する、巨大な大陸なのです。これだ

■アフリカの衛星写真（NASA）

け大きな大陸ですから、アフリカには多様な自然があり、多種多様な文化をもった人びとが暮らしているのは当然ですね。

## アフリカに対する思い込み

ところが、このアタリマエのことがあまり知られていないのです。たとえば、皆さんはアフリカにはどんな自然が広がっていると思いますか。おもしろいことに、アフリカは砂漠だという人もいれば、アフリカは至るところジャングルに覆われているという人もいます。さて、どちらが本当なのでしょうか。

正解は、そのどちらでもありません。アフリカ大陸の中央部には赤道が走っています。したがって、広大なコンゴ盆地からギニア湾の沿岸にかけては、アマゾンに次ぐ規模の熱帯雨林（ジャングル）が発達しています。また、アフリカ大陸の北部には北回帰線が通っており、その下には世界最大の砂漠であるサハラ砂漠があります。南回帰線のあたりには、ナミブ砂漠があります。そして、熱帯雨林と砂漠とのあいだには、これまた広大なサバンナが広がっているのです。

つまりアフリカには、熱帯雨林も砂漠も、はたまたサバンナまでもがあるというのが正解なのです。

## アフリカはライオンだらけ!?

さあ、つぎにこれはどうでしょう。皆さんは、アフリカには至るところにライオンがいる、と信じてはいませんか。これも大きな間違いです。

まず、ライオンはサバンナの動物であり、砂漠や熱帯雨林にはいないからです。なぜでしょうか。

答えは、熱帯雨林や砂漠には「草」が生えないからです。草は植物ですから、成長するためには光と水が必要です。しかし熱帯雨林では、高木にさえぎられて光が地面まで届かないので、草が生長できないのです。砂漠では、雨が少なすぎるので草（ほとんどの植物）が生長できないのです。したがって、大量の草が生えることはサバンナの大きな特徴なのです。でも、草とライオンはどうつながるのでしょうか。

約一〇〇〇万年前、エチオピアからケニア、そしてタンザニアへ至る東アフリカで、地下のマントルが上昇をはじめました。その結果、この地域では地殻が押し上げられるとともに左右に引き裂かれることになり、全体的に盛り上がって山になりながら、あるところでは大地が引き裂かれて、大地溝帯と呼ばれる長〜い長〜い谷が出現しました。この山と谷の出現によって降水のパターンが変化し、それまで熱帯雨林であったところが乾燥しはじめ、疎らな木と木の間に草が生えるサバンナになっていったと考えられています。

つまり、サバンナの草を食べる「草食」動物は、大地溝帯の出現とともに進化してきたのです。もとは森で葉を食べるディクディクのような小さな有蹄類から、いまではヌー、インパラ、トムソンガゼル、グラントガゼル、エランド、トピなど、実に多種多様な草食動物が進化してきたのです。そして同時に、サバンナではさまざまな種類のアカシアの木が進化し、その葉を食べるキリンやゲレヌクなどの「葉食」動物も進化してきました。

ここまでくると、もう皆さんにもおわかりでしょう。そう、多様な植物食動物の進化が、肉食動物の進化の引き金になったのです。ライオン、ヒョウ、

グレビーシマウマ

ゲレヌク（手前）とグランドガゼル

アフリカゾウ

オリックス（手前）とインパラ

キリン

アカシア

ライオンの皮

ヒョウ

チーター、サーバルなどのネコ科の動物だけでなく、リカオンやジャッカルなどのイヌ科の動物など、サバンナの肉食動物の種類はよそと比較にならないくらい豊かなのですが、これらの肉食動物もまた、サバンナが生み出したサバンナの子どもたちなのです。これで、ライオンはサバンナにしかいないことが理解できましたね。

## サバンナはライオンだらけ!?

さて、最後の疑問です。ライオンはサバンナで生きているのですが、実は、サバンナでもライオンを見つけることはそんなに簡単なことではないのです。なぜでしょうか。

ライオンの餌となるのは、そう、ヌーやインパラなどのレイヨウ（カモシカ）の仲間、キリン、シマウマなどの植物食動物ですね。ライオン一頭が生きてゆくためには、一週間に約三五～五〇キログラムの肉が必要です（ホノルル動物園の資料より）。ライオンがもっとも多く捕食するヌーの体重は、約二〇〇キログラム（オス一五〇～二七〇キログラム、メス一一八～二〇八キログラム）です。そのうち骨や角などを除いた可食部分が五〇％あるとすると、ライオン一頭は、二週間に一頭、一年間に約二六頭のヌーを捕食する必要があることになります。

もちろん、ライオンはヌーだけを狩って生きているわけではないので、この数値はあくまでも仮定の話にすぎませんが、一頭のライオンが生きてゆくためには、多くの植物食動物が必要であることがわかりますね。そして、できるだけ多くの植物食動物を狩るために、ライオンはひじょうに広い範囲を動き回っているのです。

そうです。これが、サバンナでもライオンを見つけることができない理由なのです。植物食動物を食べる肉食動物は、個体数が少なく広い範囲を行動するので、なかなか見つけることができないのです。そのうえ、サバンナの野生動物が暮らすことができる地域が、人間の活動によって狭められており、ますますライオンの数は減っているのです。

だいぶ回り道をしましたが、これでようやく最初の疑問にたどり着きました。けっして、アフリカには至るところにライオンがいるわけではないのです。サバンナ限定だし、サバンナでもなかなか会えないし。

そんな稀少なライオンが、タンザニアのセレンゲティ国立公園にはなんと約三〇〇〇頭も生息しています。この地域にどれほど豊かな自然が残っているかを、この数が雄弁に物語っています。これだけのライオンを生かす植物食動物たちが存在し、その膨大な数の植物食動物を活かす植物が存在しているのです。

さまざまな動物を生み出したサバンナは、アフリカの自然の、いや地球の生命の宝庫と呼んでもいいでしょう。そのサバンナの最後の砦が、タンザニアのセレンゲティ国立公園とケニア南部のマサイマラ国立公園にかろうじて残っているのです。なんとかその砦を、子孫に残してゆきたいものです。

（しかの・かずひろ／生態人類学）


――参考資料――

□小倉寛太郎　一九九四　『フィールドガイド・アフリカ野生動物』　講談社ブルーバックス

□小原秀雄　一九七八　『アフリカの野生動物』　玉川大学出版部

□タンザニア・セレンゲティ国立公園の公式サイト（http://www.serengeti.org/main_serengeti.html）

□ハワイ・ホノルル動物園のホームページ（http://www.honoluluzoo.org/lion.htm）


■

# ロードトリップ

## ――ロッキーを越えて――

小倉佳代子

大陸横断鉄道アムトラックとバスを乗り継いで二十八時間。アメリカ西海岸のロサンゼルスからコロラド州の州都デンバーまで約一三〇〇キロ。

ロサンゼルスまでは、松江から夜行バスに乗り成田から飛行機で移動。デンバーまでは家を出てから結局三日間移動し続けたことになる。そこで約一週間滞在し、デンバーからロサンゼルスまでの帰路は、車で旅をすることとなった。

デンバーを出たらロッキー山脈を越え、アメリカで唯一、四つの州が接しているフォーコーナーに寄り、コロラド川沿いに走り、砂漠の町を過ぎ、目指すはロサンゼルスの海岸ロングビーチという五泊六日のロードトリップである。

当初デンバーに到着したときは階段を昇るだけで疲れ、なんとなく眠たいという状態がしばらく続いたので体力に自信をなくしていたのだが、お土産として持ってきていたカップ麺を見て原因が判明。蓋がパンパンに膨らんでいたのだ。標高一六〇〇メートルを越えるデンバーでは気圧も低く、それだけ空気も薄い。息が切れるわけだ。

デンバーから西へ向かうとしばらくは山道で緑が続くのだが、だんだん頂に雪をかぶった山が見え始め、道の両脇に白いものが見え、スキー場が出てくるとまるで雪国にきたような錯覚を覚える。高度もあがるからか、やたらと眠たくなる。高山病の経験はないが、もしかして軽く罹（かか）っているのではないかと少し不安になる。

そこからさらに南西へ行くと雪も無くなり、コロラド川沿いにまるで西部劇のような世界が広がってくる。馬や馬車が活躍していたであろう時代を髣髴（ほうふつ）とさせる土地だ。渓谷を進んでいくとまた景色は大きく変わる。大地は赤く、流れる川も赤みを帯びてくる。まわりには風雨に晒され、まるで丸く彫刻されたような赤い岩が、絶妙なバランスで重なり合って立っているのが目につく。モニュメントバレーの近くまで行ったが、あまりの風に砂が巻き上げられてまるで砂嵐のようだった。一瞬車外に出ただけなのに、いつのまにかポケットの中にザラザラと砂が入っている。

ユタ、コロラド、アリゾナ、ニューメキシコ。この四つの州が交わる点、フォーコーナーもまるで土漠のようなところだが、ただの辺境の州境だというのに意外と観光客が多い。

アリゾナ州に入ると、まだ標高は高いらしく、一晩で雪が二、三センチも積もる。車で走っていると、いきなり霧のかたまりに突っ込んではすぐ抜け、それを何回か繰り返す。不思議な霧と思いきや、標高が高いので路面が雲に接しているのだ。アリゾナからひたすら西へ向かうと、こんどは砂漠が広がる。砂漠なのだが、カリフォルニア州に入りドライブインで車から出たとたんに湿気を感じた。毎日尋常ではない量のハンドクリームとリップクリームを消費し、物を触るたびに静電気をおこすほどの乾燥のなかから、急に潮風を感じる。これほど強く海を感じる瞬間はない。

ロサンゼルスに近づくと、遠くからでも町の上に黄色いスモッグがかかっているのが見える。これまでの道のりとのあまりの違いに、引き返したくなる衝動に駆られたのだが、旅の到着点のロングビーチへと向かい、六日間のロードトリップは幕を閉じた。

アメリカでは自分の住んでいる州からもあまり出ず、ましてやパスポートを取り外国旅行するなんて、と思っている人が結構いるという話も頷ける。たった六日、のんびり走っただけで雪山から砂漠、都会、海に至るまでのさまざまな場所に行けるのだ。

車で移動し安モーテルに泊まりながらの旅行。鉄道での旅ももちろん楽しいが、ロードトリップもまた楽し。

（おぐら・かよこ／総合文化学科非常勤講師、「DTP演習」等担当）

# 銀幕の中のアメリカ

小玉容子 & 高尾亜友美

**小玉**　こんにちは。今日は六〇年代後半から七〇年代のアメリカ映画を、映画好きの英文専攻、高尾さんと一緒に紹介するという企画です。何故この時代か。一番の理由は、六〇年代後半から始まった世代交代により、アメリカ映画界に新しい風が吹き、それまでの主流アメリカ映画では扱われないようなテーマが扱われ始めたことです。プラス、アメリカの歴史上、この時代はベトナム戦争そして敗戦、反戦運動、ウォーターゲート事件やニクソン大統領の失墜などの時代で、社会に対する幻滅を感じた若者が新しい価値観を求めた、カウンター・カルチャー、すなわち反体制文化の時代でもあります。そのような時代に若者たちを引きつける多くの映画が制作されました。

　若い人たちは、古い映画をあまり観ないと思いますが、今回かなりの数の作品を短期間に観て、その結果いかがでしたか。

**高尾**　自称映画好きですが、時代を超えた名作を幅広く見ていないと映画好きとは言えないな、と実感しました。アメリカン・ニューシネマという言葉は聞いたことがありましたが、私が生まれる前の時代なので明確なイメージは持っていませんでした。今回いろいろな映画を観て、古いなと思うこともありましたが、新鮮でもありました。

**小玉**　今、ニューシネマという言葉が出ましたが、英語では「ニューハリウッド」と呼んでいます。その第一作はアーサー・ペン監督の『俺たちに明日はない』（一九六七）で、当時の観客は他にも『卒業』（一九六七）、『真夜中のカーボーイ』（一九六九）のような作品を観て、映画界に新しい時代が到来したことを実感したようです。その後、当時の社会に対する疑問や時代の真実を探求する、独創的で心に残る主題の映画が数多く制作されました。

　それらの中から、共通項を絞って作品をピックアップしていきましょう。突然ですが、ロバート・レッドフォードは知っていますか。七〇年代のアイドル的ハリウッドスターで、数多くの作品に出演しています。

**高尾**　ええ、知っています。『スパイゲーム』（二〇〇一）でブラッド・ピットと共演しているので知っています。ブラピに似ているなと思い、若いレッドフォードの映画を観てみようと思っていました。

## 明日のない「明日」

**小玉**　やはり「ブラピに似ている」という言い方になるんですね。三谷幸喜氏が新聞のコラムで書いていました（二〇〇七年六月二十三日付『朝日新聞』「三谷幸喜のありふれた生活」）。「若い頃のロバート・レッドフォードってブラピに似ているんですね」。若い人がそう言うのを聞いて三谷氏は、そうじゃなくて「ブラピがレッドフォードに似てるんだ」と。今日の前半はそのレッドフォードの映画を中心に紹介していきましょう。彼の数多くの作品の中から、ポール・ニューマンと共演している『明日に向かって撃て！』（一九六九、日本公開一九七〇）と『スティング』（一九七三）、バーブラ・ストライサンドと共演の『追憶』（一九七二）、ダスティン・ホフマンと共演の『大統領の陰謀』（一九七六）を取り上げました。

　まず、ニューシネマの傑作の一つと言われる『明日に向かって撃て！』を、高尾さん紹介してください。

**高尾**　この映画の舞台は一九八〇年代の西部で、主人公の二人、サンダンス・キッド（ロバート・レッドフォード）とブッチ・キャシディ（ポール・ニューマン）は強盗団の仲間とともに、銀行強盗や列車強盗を繰り返すお尋ね者です。二人は、まず行きの列車を襲って、帰りはないだろうと油断させておいて帰りにも積荷の給料を奪うという作戦で列車強盗を計画します。でも、裏をかいたつもりが裏をかかれ、帰りの列車強盗では、鉄道会社が雇った追跡隊の到着は早く、彼らは命からがら逃げます。執拗な追っ手から逃れるため、心安まる時のない彼らの逃亡の旅が始まります。

**小玉**　西部劇でおなじみの列車強盗ですね。サンダンス・キッドとブッチ・キャシディは十九世紀終わり頃に実在したアウトローで、「ワイルド・バンチ」と呼ばれる強盗団の一味だったそうです。大陸横断鉄道が一八六九年に完成し、列車が重要な輸送機関になりました。どのタイプであれ、交通機関の進

展は人と物の交流も進展させ、世界が変わっていきます。また、一八九〇年の国勢調査で、辺境が消滅したことが確認されました。すなわち西部の開拓時代が終わったとされる年でもあります。このように、新しい時代が始まろうとしていました。新しい価値観を模索した六〇年代七〇年代との共通点とも言えます。

**高尾**　西部劇というと悪人が出てきて、保安官や早撃ちのガンマンが悪人たちを倒すという、勧善懲悪のパターンを想像します。しかしこの映画では、追跡隊も善の象徴とは言えず、逃亡するアウトロー二人の絆や性格、生き様を描いている点で、ニューシネマなのだと思いました。

**小玉**　そうですね。十九世紀末のアメリカは、開拓が進んだ西部の地にも法を浸透させようとしていた時代です。銃が支配する西部劇の時代は終わりを告げていたのです。ひたすら逃げる二人の姿は、泥沼化していたベトナム戦争に反発し、体制に背を向け、現実から逃げようとしていた当時の若者の願望を表現していた、という映画評もありますが、逃亡の先が「死」だということで、逃げ場のない閉塞状況は制作当時のアメリカと重なります。

**高尾**　二人はサンダンスの恋人エッタと三人でボリビアへ逃げます。

**小玉**　エッタを演じているのが『卒業』のキャサリン・ロスですね。

**高尾**　彼らにとってボリビアは鉱山資源が豊富な豊かな国で、そこで荒稼ぎができるはずでしたが、着いてみると豚や牛がのんびりと鳴き声を上げる貧しい国でした。映画の中で何カ所か笑いを誘うというか、苦笑させられる場面がありましたが、この時の期待はずれの場面もその中の一つでした。彼らはボリビアでも銀行強盗を繰り返しますが、最初の頃はスペイン語が話せないのでうまくいきません。

**小玉**　ええ、かっこよく決めるべき強盗が決まらない、そんな不器用さがおかしくもあり、哀れでもありますね。他にも、追っ手に崖に追い詰められ泳げないことを告白するサンダンス、百戦錬磨の強盗だが、人を撃ったことのないブッチ。先の列車強盗の計画も人のアイデアを盗んだり、たどたどしいスペイン語で強盗をしたりと、かっこ良いヒーローでは決してないですよね。

**高尾**　ボリビアにまで追跡の手が伸びたことを知った二人は、目立たないようにと真面目に働くことを決意しますが、見つけた仕事は皮肉なことに給料運搬の護衛でした。しかし現地の強盗団に襲われ、あっという間に失業します。その後、レストランで食事をしているところを通報され、警官との銃撃戦になり納屋に逃げ込みます。彼らは次に逃げる先は英語が通じる場所がいい、オーストラリアに行こう、と話しますが、既に包囲された二人には未来はないのです。そして銃を両手に表に飛び出していきます。映像は止まり、銃声だけが響き渡り、画面はセピア色になり、物語は終わります。

**小玉**　ブッチとサンダンスの絆の強さだけが本物で、後は不確かな現実があるのみ、ということですね。ニューシネマの第一作と言われる『俺たちに明日はない』もボニーとクライドという、不況の三〇年代に実在した銀行強盗をモデルにしていて、逃亡、そして最後の「死のダンス」と呼ばれる警官による銃撃など、『明日』と同じパターンの映画です。

**高尾**　今までにこれだけ暴力的なラストシーンの映画は観たことがなかったので、衝撃的でした。

**小玉**　七〇年代当時の若者たちも同じように、これまでの公式を打ち破った新しい描き方に引きつけられたようです。暴力や残酷さ、明日が見えない若者たちの生き様。ニューシネマは若者をターゲットにして、テレビの普及で減少した観客を取り戻したのです。『明日』の二人組は、同じジョージ・ロイ・ヒル監督の『スティング』でも共演しています。

**高尾**　これは面白かったです。今回観た映画の中では一番のお勧め作品です。

**小玉**　三谷幸喜氏も先の新聞のコラムで、「スティングが面白い」と言ってましたよ。時が経っても色あせない面白さはどこにあるのでしょうか。

## コン・マンって何？

**高尾**　誰が誰の味方なのか、というのが観客側にはわからないようになっているのがおもしろく感じました。勿論、ポール・ニューマンとロバート・レッドフォードのかっこ良さにもよるのでしょうけど。

**小玉**　では、紹介をお願いします。

**高尾**　はい。舞台はシカゴ近郊の町。一九三六年、アメリカは不景気の真っ只中です。詐欺師の若者フッカー（レッドフォード）は、自分の相棒でもあり詐欺の師匠でもあるルーサーを殺され

復讐を誓います。相手はニューヨークのギャングの大親分ロネガンです。フッカーは大物詐欺師として知られるルーサーの友人ゴンドルフ（ニューマン）を訪ね、助けを求めます。

**小玉**　詐欺師とギャングの戦い。これもやはりこれまでの勧善懲悪的映画の主流から外れていますね。二〇年代から三〇年代初頭にかけては、お酒の製造や販売を禁止する憲法修正案が成立し（一九二〇―一九三三）、裏の世界で酒が密造され、ギャングたちが力を得た時代です。シカゴの暗黒街のボス、アル・カポネ（一八九九―一九四七）の時代でもあります。

**高尾**　ゴンドルフは詐欺師チームを作り、悪徳刑事までもまんまとだましします。刑事までだまされるということは、痛快でした。そして、ロネガンからまんまと五十万ドルをだまし取ります。『七〇年代アメリカン・シネマ一〇三』（フィルムアート社、一九八〇）に、「この映画でほんとうにだまされるのは……観客なのである」とあるように、最後に観客は「アッ、だまされた」という感じになるんです。観ている方もハラハラしますし、スリル満点です。

**小玉**　詐欺師のことを「コン（コンフィデンス）・マン」とよび、アメリカ特有のキャラクターとして古くからその地位を築いています。「コンフィデンス」は「信用」という意味で、人を信用させてだましします。コン・マンは小説などにもよく登場し、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八四）にもコン・マンが登場しますよね。

**高尾**　はい。『ハック』のコン・マンもおもしろいキャラクターでよく覚えています。

**小玉**　音楽についても一言。ジョージ・ロイ・ヒル監督はこれら二作品で「雨にぬれても」や軽快なジャズピアノなど音楽を効果的に用いていて、映画の忘れられない一部になっています。

　次は『追憶』と『大統領の陰謀』に移りましょうか。この二作品でも、レッドフォードは相変わらず、現代の若者にもかっこよく映りますか。

**高尾**　『追憶』では、レッドフォードが、スポーツ万能で成績優秀な大学生ハベルを演じます。お坊ちゃん役で、強盗や詐欺師のレッドフォードの別の一面を見ることができました。大学時代の描写は、昔の大学生はこんなんだったんだ、と思わせます。白のVネックセーターを着ていたり。その後は軍人、そして脚本家となり、正統派アメリカ男性だろうなという感じです。

**小玉**　ストライサンド演じるケイティは、貧乏学生で、活発な活動家でもあります。『追憶』は、一九三〇年代に大学生活を送った男女の物語で、およそ二〇年間の時の流れの中で、彼らの再会、結婚、離婚、そして二度目の再会を、戦争、終戦後の赤狩りという時代のバックグラウンドとともに描いていますね。

**高尾**　ケイティは社会主義活動家ですが、ハベルやその仲間は全く関心を持ちません。ほとんど共通点のない二人の愛が長続きしないのは当然のように見えました。二人が互いに抱いている優しい気持ちは感じましたが、二人が別れるからこそ、ある意味リアルなラブストーリーでした。

**小玉**　七〇年代はベトナム反戦の学生運動の時代でもありました。『いちご白書』（一九七〇）も観ていますよね。『追憶』も『いちご』も政治的活動と恋愛の映画です。『いちご』は若いナイーブな男子大学生がベトナム反戦活動に参加している女の子に一目惚れをして、活動の輪に入っていきます。この二人にとって、活動そのものは社会を良くしようという理想を掲げてのものではなく、学生運動という時代の、その動きの中に身を置いているだけのようです。結局、時代は二人の恋愛を壊してしまいます。『いちご』のラストシーンもやはり暴力的ですね。

　次は『大統領の陰謀』ですが、いかがでしたか。

**高尾**　『大統領』では、ワシントン・ポスト紙のダスティン・ホフマン演じるカールとレッドフォード演じるボブの二人の駆け出し記者が、ウォーターゲート事件を取材し、政界の腐敗を暴きます。一九七二年のウォーターゲート事件の真相は、二人の実在の記者により明らかになりました。彼ら二人の取材活動や調査など、映画でもその姿は克明に描かれています。

**小玉**　二人が仕事をする新聞社の編集局もセットで再現され、壁に張られたステッカーや紙くずかごに至るまで、実際の物を編集部から借りてきて撮影が行われたそうです。実際の事件を映画化し、ドラマ性を高めるための工夫が凝らされた映画です。『大統領』のレッドフォードはいかがでしたか。

**高尾**　最初の二作品と異なり、時代がいっきに一九七〇年代になり、役柄も追われる身から、追う身になっています。『大統領』では、キャラクター云々というより、事件を解明しようとする記者たちの姿、これが観客の意識（姿勢）と重なり、応援しながら観てしまいます。「ディープ・スロート」と名

付けられた情報提供者に会うボブですが、パーキングの場面などはサスペンス感覚が溢れていました。

**小玉**　ウォーターゲート事件の説明は省きますが、この事件はニクソン大統領の退陣で一応の幕を閉じます。しかし政治不信が簡単に拭われることはありませんでした。「ウォーターゲート」という語が、「（政治的）腐敗事実を（見つけ出して）公表する、摘発する」という意味でも使われるほど、大きな政治スキャンダルだったのです。七〇年代は、世界的に不安要素が多い年代で、ベトナム戦争もそうですが、大衆は社会に幻滅を感じざるを得ませんでした。『大統領』におけるように、アメリカの夢の陰の部分が大衆の目にも明らかになったのです。

七〇年代後半になると、ベトナム戦争を扱った映画も制作されるようになり、第一の波として七八年の『帰郷』『ディア・ハンター』、七九年の『地獄の黙示録』などが制作されました。また八〇年代後半には第二の波がきて、八四年の『キリング・フィールド』、八六年の『プラトーン』、八七年の『ハンバーガー・ヒル』や『グッドモーニング、ベトナム』、八九年の『七月四日に生まれて』や『カジュアルティーズ』など数多くの作品が制作されました。この八〇年代後半の波は、冷戦終結に至るレーガン大統領時代の外交政策が影響していたと思われます。ここでは、七〇年代の作品を紹介したいと思います。ベトナム戦争ものは、作品ごとに内容をみていくのではなく、全体としての傾向や描き方を見ていきましょう。

**高尾**　話は横にそれますが、『真夜中のカーボーイ』のジョー・バック役で注目された俳優のジョン・ボイトが、『帰郷』では車いすのベトナム帰還兵を演じていました。資料をいろいろ読んでいるうちに、彼の一人娘がブラピの奥さん、アンジェリーナ・ジョリーだと知りました。へー情報です。

**小玉**　へー、ですね。

## ベトナム、そして……

**高尾**　全体に、戦争の恐怖をひしひしと感じました。ベトナム戦争ものはもちろん反戦を訴えています。『帰郷』では、下半身不随となったベトナム帰還兵ルークが、最初は自暴自棄な入院生活をしていましたが、恋愛を通して立ち直り、最後には高校生を前に戦争の無益さを語ります。『帰郷』だけでなく『ディア・ハンター』でも、八〇年代ベトナム戦争ものでも、帰還兵たちは、怪我を負っていたり、精神的に病んだりしていて、帰国後も普通の生活に戻ることは難しいことが描かれています。

兵士達の中には自ら志願した若者も多くいますが、どの映画でも黒人兵たちは、自分たちが貧しいゆえに戦争に参加しているのだと言っていた点が気になりました。帰還兵への世間の目は冷たいのですが、悪いのは戦争に行った兵士ではなく戦争である、というのをいろいろな映画を観て感じました。

**小玉**　『ディア・ハンター』では、ロシアン・ルーレットなども含め、戦争の狂気を描く一方で、平穏な日常を送っているスラブ系移民の息子たちが、「祖国アメリカのために」戦場に赴き、怪我をする者、命を落とす者もいるのに、最後には「God Bless America――神よアメリカに祝福を」と歌い、アメリカ人としての日常に戻ります。この映画は、自分の育った故郷を愛する若者の、友情（と裏切り）、恋愛、家族愛、民族意識、そしてアメリカ人としての国民意識など、戦争だけでなく多くの側面を持つ映画です。また別の機会にじっくり扱いたい映画ですね。

最後に、七〇年代映画を観ての感想を教えてください。

**高尾**　すべて初めての映画でした。映像だけを見ると古いな、と思うことがあったけど、やっぱりヒットしたものは今観てもおもしろかったです。ちなみに私の一押しは『スティング』です。今、映画の質が落ちていると言われています。ぜひ若い人に過去の名作も観てほしいと思いました。きっと好きになると思います。あと、ベトナム戦争ものはとても考えさせられるので、こちらもぜひ観てほしいです。

**小玉**　今でも語り継がれるヒット作、『ジョーズ』（一九七五）、『ロッキー』（一九七六）、『スター・ウォーズ』（一九七七）、そして『ゴッドファーザー』（一九七二）などもこの時代に制作されました。今回扱った作品は、ほんの一部で、もっと多くの作品を、細部まで語りたい思いは持ちつつ、ここで終わりにしようと思います。私は若い時にこれらの映画のほとんどを観ていましたが、今回じっくり見直す機会を得て、やはり六〇年代から七〇年代にかけては語る価値のある映画が多かったと改めて実感しました。へー情報も含め、また次の機会にもっと語り合いましょうね。では、高尾さん、今回は大変ご苦労さまでした。

（こだま・ようこ／アメリカ文学＊たかお・あゆみ／英文専攻二年）

# 有名人の墓をたずねて
## ――墓マイラーの旅――

竹森徹士

墓、あるいは墓地と聞いて連想するものはそれほど心地よいものではないかもしれない。それは、誰もが避けては通れぬにもかかわらず、日常的には忌避しているもの、こうして言葉にするのも怖いもの――死を連想させる。

お盆などにお墓参りで墓地に行くと、墓地のじめっとしてひんやりとした空気に、日常の閾（いき）を越えて非日常的な世界に入ったような気がする。立ち並ぶ墓の間を歩いていると、人気のない墓地に「メメント・モリ（死を想え）」という声がどこからか響いている。

だがそればかりではない。お墓は、肉親や知人など私たちの愛する人々が眠っている場所でもある。そんな人たちのお墓の前に立つと、彼らの生きた証と、今ここに自分がいることの存在感のようなものをあらためて確かめることができる。

また（ここからが今回の本題である）、教科書などに出てくる歴史上の人物や著名な芸術家などが眠っている場所でもある。別世界の人のようにしか感じられない有名人でも、その人のお墓の前に立てば「ああ、この人も生きてたんだなあ」と実感できるものだ。生前は会うことが叶わなくとも、お墓に行けば会うことができる。好きな作家など、自分に感動を与えてくれた人物のお墓を訪ねれば、直接（！）会ってお礼を言うこともできる。

前置きはこのくらいにしておいて、そういうわけで、以下、私が訪れたお墓から、全く私的な関心にもとづいて、いくつかを取り上げたい。私は墓や埋葬の研究家ではない。ただ好きな著名人、関心のある著名人の墓に行って挨拶がしたい、それだけである。

■澁澤龍彦（1928-1987）

フランス文学者、作家、評論家、サドの翻訳家として知られ、魔術、秘密結社、幻想文学など、いわゆる西洋の異端的な人物や題材を取り上げた著書が多く、学生時代に愛読した。『思考の紋章学』、『夢の宇宙誌』、『記憶の遠近法』など、著書のタイトルも面白い。本学図書館には著作集が揃っている。

そもそも著名人の墓巡りに思い至ったのは、学生だった十数年前、何かの記事で澁澤龍彦の墓の場所を知り、行ってみようと思ったのがきっかけだった。墓は北鎌倉の浄智寺にある。写真ではよく見えないかもしれないが、トレードマークのサングラスが墓石の上に置いてあった。

■夏目漱石（1867-1916）

作家として有名だが、もともとは英文学者だった。「倫敦塔」という幻想的な小品がある。「こんな夢を見た」で始まる小編集『夢十夜』などもいかがだろう。墓は池袋の雑司が谷霊園にあり、その大きさに驚いた。雑司が谷霊園は漱石以外にも永井荷風、泉鏡花、竹久夢二など著名人の墓が多くある。銭形平次の大川橋蔵の墓もあった。入り口の事務所に著名人の墓の地図が置いてあり、地図を見ながら墓を回ることができる。松江に縁の深い小泉八雲の墓もここにある。

■泉鏡花（1873-1939）

墓は雑司が谷にあるが、生まれは北陸の金沢の人である。富山出身の私はいくらか親近感を覚えている。飛騨山中の異界で旅の僧が魔性の女に遭遇する物語『高野聖』のなかで、馬に変えられてしまったのは富山の薬売りだった。雑司が谷霊園は池袋の真ん中にあるとは思えない静かな場所である。写真にあるように、墓の後ろにそびえるビルとは対照的な世界である。

■ブルース・リー（1940-1973）

四十近くの私くらいの年代の人なら誰でも知っているアクションスター。私も子供の頃はブルース・リーに憧れてヌンチャクを振り回していた一人である。アメリカのシアトルのレイク・ビューという墓地にある。シアトルに墓があることを知り、墓地に行ったところまでは良かったが、墓が多すぎて困った。中国系の人たちの墓地が集まっている辺りを回ったりしてみたが分からず、途方に暮れていたところ、有難いことに、たまたま出会った警察官らしき人が教えてくれた。同じく謎の死を遂げた息子のブランドン・リーの墓が隣にあった。

■ジミ・ヘンドリックス（1942-1970）

通称「ジミヘン」で親しまれているロックギタリスト。アメリカのシアトル近郊のレントンという町のグリーンウッド・メモリアル・パークというところにあった。写真のように、墓は地面に埋め込まれた石のプレートのようなものである。訪れる人が多いのだろう、墓の事務所で場所を聞いたら、地図のコピーをくれた。この写真は七年前のもので、当時はこんな様子だったが、今は大きな記念碑のようなものが建てられたらしい。ギターを歯で弾いたり、ギターに火をつけるなど、派手なパフォーマンスが取り上げられるが、重要なのは演奏のほうだ。

■ウィリアム・ブレイク（1757-1827）

イギリスの詩人・版画家。ロンドン市内の中心部のバンヒル・フィールズという墓地にある。バンヒル・フィールズにはブレイク以外にも『ロビンソン・クルーソー』のダニエル・デフォーや『天路歴程』のジョン・バニヤンの墓もある。イギリスには Lynn F. Pearson, *Discovering Famous Graves* (Shire Publications) という、うってつけの本があり、著名人の墓探しに役に立つ。

■トマス・ハーディ（1840-1928）

イギリスの詩人・作家。もともとは建築家見習いだったが、転じて作家となったという、ちょっと変わった人物である。代表作は『テス』、『日陰のふたり』というタイトルで映画化されている。ロンドンから電車に揺られて数時間、ドーセットというところに墓がある。駅に着いてドーチェスターの街に着いたあと、観光案内所の人に場所を聞いたところ、歩いていくのは大変そうだったので、田舎道をタクシーに乗せてもらって行った。墓は小さな教会の脇に見つかった。今から八年前の

ことだ。ハーディの墓はこの写真の他に、ロンドンのウェストミンスター寺院にもある。おかしな話である。

墓巡りなどとは奇特な趣味（？）に思われるかもしれないが、数年前、インターネットで「文芸ジャンキー・パラダイス」なるページを発見した。そのページの管理人の方は、著名人の墓を巡って世界各国を回っているらしい。しかもその数八百以上であり、それぞれの墓に写真と丁寧なコメントが付いている。なんという精力漢。私は未見だが『東京・鎌倉 有名人お墓お散歩ブック』（大和書房、二〇〇五）

■エレンズバーグの墓

という本まで出されている。

こうした趣味の人たちを墓マイラーと言うそうである。同じ趣味の方がいるものだと喜んだものの、私など全く足元にも及ばず、とても同好の士と呼べそうにない。私などまだまだ未熟な墓マイラーである。墓マイラーの旅、いかがですか。

（付記）

ところで、私は今、交換教授としてアメリカのワシントン州のセントラル・ワシントン大学に来ている。大学のあるエレンズバーグは人口一万五千人程度の小さな街である。そのエレンズバーグの墓地は、街を見下ろせる小高いところにあり、芝地に様々な形の墓石が並んでいて、日本の墓地とは印象がかなり異なっている。

また、エレンズバーグ近郊にロズリンという炭鉱の町があり、そこの墓地は民族、社会組織別に埋葬されていることで有名な墓地らしい。そのロズリンの墓地に連れて行ってくださった先生から、ヨーロッパでは墓地にピクニックに来る習慣があると伺った。日本ではあまり考えられない習慣である。

（たけもり・てつし／イギリス文学）■

# 道草のある旅

小泉　凡

昨年八月のある日曜日、松江駅六時五九分発の普通列車新見行きの客となった。中二の息子を連れて「青春18きっぷ」の旅である。目的地は私の両親の住む横浜市。つまり八八二・八キロを普通列車と快速列車を乗り継ぎ、丸一日かけて行こうという試みだ。

米子から伯備線に入るとぐーんとスピードが落ちる。生山の一つ先の上石見駅では十七分も停車する。ホームに降りた瞬間、高原の匂いがする。平地を走る山陰線では感じられない匂い

だ。子どもの頃、年に一度八ヶ岳や南アルプスに家族で出かけた時に、高原を走る中央線や小海線の列車のドアが開くたびに感じたあのみずみずしい山の匂いが蘇った。風景は忘れても匂いはどこかに留まっている。思いきり背中を伸ばして深呼吸。岡山へ急ぐ「やくも」を見送りながら、「匂い」まで楽しめる鈍行列車を心の中で自慢した。

新見と岡山では三十分の乗り継ぎ待ちの時間がある。この長くも短くもない時間を利用した駅前散歩という道草が意外に楽しい。新見では商店街の洋品店で旅行用品を調達し、自販機で買ったコーヒーを飲みながら高梁川の土手道を散策する。岡山では息子のチョイスによるシンプルなカレーを食べてから、輸入食料品を扱うスーパーでのんびり旅を演出するためのお茶やワインやおつまみを買う。ここでやっと旅程の四分の一が終了。

山陽線に乗ると乗客も多くなり、いままでの旅とは趣が変る。それでも、新幹線のように早送りのビデオ画面の車窓ではなく、心地よい速さで景色が流れる。姫路からは時速百四十キロで走る新快速で関西を東へ駆け抜け、時間と距離を稼ぐ。

滋賀県の野洲で再び普通に乗り換え、日が少し西に傾きかけた頃、安土着。その一時間後には関ケ原を通る。息子は何でこんな鄙(ひな)びたところがかつて日本の歴史を動かしたのかと不思議に思ったようだ。教科書の歴史を身体感覚で感じるのもこの旅の魅力の一つだ。

米原からJR東海の電車に乗り換えると、編成が短いこともあって車内はかなり混雑してくる。名古屋を過ぎたところで、浴衣姿の若い人たちのうきうきした笑顔と歓声で、車内は朗らかな熱気に包まれる。そんな中、蒲郡で三河湾に沈む見事な日没を堪能した。この日、蒲郡と沼津港で花火大会が開催されていた。見物に向かう若者たちの表情に、今も昔も変わらぬ夏の粋を楽しむ日本人の本質を垣間見たような気がする。

浜松からは夜汽車の旅となる。米原で買った駅弁の焼き鯖寿司を開く。熱海からJR東日本の十五両編成の長大なロングシートの湘南電車に乗り換えると、大都会が近づいたことを実感するとともに、通勤客の雑踏に組み込まれたせつなさを感じる。相模湾の漁火が見える頃、安心したのか夢の中へ。そして大船駅で十一回目の最後の乗り換えを終え、実家の最寄り駅となる横須賀線の逗子駅に二三時二九分着。十六時間三一分の旅が終った。

十一回の乗り換えは、ともすれば退屈な長旅の気分転換にはなるが、日本の鈍行列車がいかに細切れでしか走っていないかということを思い知らされる。そして中学生時代の感動的小旅行の一こまが蘇った。

ある土曜日の午後、横浜駅から五十数キロ離れた小田原まで用事で出かけた際、たまたま飛び乗った東海道線の列車が「桜島・高千穂」という名の西鹿児島行きの機関車の牽引する長距離列車で、ボックス席の窓を全開にして、スケールの大きな汽車旅に胸をときめかせたことを。

また、品川から浜松行きの普通列車のボックスシートを占領して、ゆっくり弁当を広げながら乗り換えなしで磐田市の民俗調査のアルバイトに行った学生時代の思い出も蘇ってきた。

その意味で国鉄時代に比べるとダイヤは効率的になったが、のんびり旅の旅情はずいぶん薄くなったことを実感する。それは日本人がいちだんと合理主義とせっかち主義を信奉するようになったことの証でもあるのだろう。

ともあれ「青春18きっぷ」の旅は節約志向を満たすだけでなく「スロー」な生き方の実践をサポートしてくれる。この旅の二カ月前に訪れたイギリスでは、残業が少ないこともあって五時台が帰宅ラッシュのピークだった。通勤電車では大半が着席して車内販売のワインやビールを楽しみながら帰宅する。自転車ごと乗り込んでくる客も多い。帰宅後、彼らは、日没までの四時間を犬の散歩やウォーキング、家族との団欒に費やす。

忙しい現代社会だからこそ、時間をつくってでも自然の中で道草をくい、自然を畏怖する謙虚さと他者を大切にする心のゆとりをもつことが必要なのではないか。自然との共生が必要な時代、「道草」のある生き方がそれを可能にしてくれるのだろう。

（本稿は、「新日本海新聞」のコラム「潮流」〈二〇〇六年十一月〉掲載の「スローな旅の魅力」に大幅に手を入れたものである。）

（こいずみ・ぼん／民俗学）